

海邊の戀

【解説】

二〇一七年十二月十日、第3回今藤政太郎作品演奏会（紀尾井ホール）において、クラシック歌手の波多野睦美氏が、日本の歌曲・邦楽をうたった「今藤政太郎作曲 小品歌曲集」より。

佐藤春夫（一八九二～一九六四）『殉情詩集』（大正十年・一九二二）所収の詩「海邊の戀」に、政太郎が曲をつけた。〈この詩を「少年の日はかない恋の思い出をこの上なく美しく歌ったもの」と感じとる作曲者から、箏・笛・三味線と歌による本作は生まれた。「こぼれ松葉」を描くかのような序奏が雰囲気を整えると、往時の「君」と「われ」が、なつかしく想起される。中間部でしばし心が浮き立つが、それも束の間、曲調は夕暮れへと沈む。やがて「はかなさは」の語が高く浮かび上がると、述語を待たずして、こぼれ松葉の情景がありありと回想される。それに自分の点じた火こそが、はかなさの象徴なのだ――。〉（磯山雅氏による曲目解説より）

昭和三九年（一九六四）長唄協会創作コンクール第二位受賞作。